秋植球根の種類と植え方

奥村実義

春から初夏にかけて咲く球根類は秋の裡に植込む必要がある。また、ユリ類のように種類によつては夏以降に咲くもので春に植えることができるものもあるが、原則として秋植えされる。したがつて、北海道のような寒地では、耐寒性の強いものに限定されるが、幸いなことにクロッカス、スイセン、チューリップをはじめ耐寒性の強い球根類が多い。

つぎに、その主な種類と植え方を紹介してみよう。

チューリップ

原産地は地中海沿岸地方（トルコ）であるが、主としてオランダで改良され発達したもので、冬は極端に寒くなくて降水量が多く、夏はやや冷涼な方がよくできる球根草花であるところから、わが国では裏日本一帯と北海道で球根がつくられている。

従来、一般にチューリップ（詳しくは園芸チューリップ）といわれていたグループには、一重〜八重、早咲〜晩咲など十幾つかの系統があつて数千の品種がつくり出され、わが国でも一、〇〇〇品種以上は栽培されている。花の色は概して派手で、赤、桃、橙、黄、白、紫その他覆輪などほとんどの色彩に恵まれている。

このほか、近年いわゆる原種チューリップに属する立派な品種もぽつぽつ現われてきた。これまでの早咲品種よりも半月以上も早咲のカウフマニアナ、十日位早咲のレッド・エンペラー、アイクレリー、プューリシマなどがそれで、花も立派である。

植え方は系統や品種が異なつてもほとんど違わない。球根を植付ける適期は九月下旬〜十月上旬であるが、球根生産が目的でなければ多少おくれても差支えない（降霜後ダリヤや一年草を取除いてからでもよい。）

肥料は早めに施しておく方が望ましいが醗酵しないものであれば植付直前でもよいから、一面にばらまいて深くすきこむ。

未熟堆厩肥、魚粕、ナタネ粕、大豆粕等のように醗酵するものは直接用いず、よく腐熟させた後に施すか、できれば前作に与えた方が安全である。化成肥料（配合肥料）を坪当り三〜五〇〇㌘程度施すのが最も手軽で安全であろう。

球根を植付ける場所はとくに悪い土地（甚しい湿地、乾燥地、日当りわるい所など）でなければ翌春立派に開花する位には育つ。一〇〜一五㌢間隔に深さ九〜一五㌢、移植ゴテを用いて球床（根のでる部分で秋には馬蹄形に隆起し始めている）の方を下にして植付ける。早咲系品種では五㌘、普通品種で八〜一〇㌘、ごく遅咲系品種で一五㌘程度の球根ならば、まず開花球とみてよかろう。

レッド・エンペラー
4月下旬 開花　緋赤色

スイセン

主としてヨーロッパ中部および地中海沿岸地方の原産であるが、イギリスでよく発達したもので、チューリップと同じような気候条件でよい。

いくつかの原種と交配種からなるが、園芸上はラッパ水仙、大杯水仙、小杯水仙、八重咲水仙、房咲水仙、口紅水仙等の十一グループにわけられている。

球根を植える時期はチューリップより少し早くて九月頃である。ラッパ水仙の系統は概して発根がおそいから九月中旬頃に植えてよいが、口紅や房咲、ジョンクイラ等のような南ヨーロッパ産の系統は一般に発根が早く、八月下旬〜九月上旬には発根してくるから、八月一杯ぐらいまでに植えた方がよい。乾燥状態で貯えておいた球根は多少おくれても差支えないが、植えつ放しのものを移す場合は発根前に移すようにしなければならない。

土質についてはチューリップほど好き嫌いがないが、壌土またはやや粘質壌土で生育中は湿りが充分であつて、夏に向つて乾く場所ならば申し分ない。肥料はチューリップと同様ないしチューリップよりも少し加里分を多目とする程度でよく、また未熟堆厩肥や醗酵するものはさける。この球根は深根性であるから、深耕しする方が望ましい。

球根を植える間隔はチューリップよりも少し狭くして差支えなく、大体球根の直径の三倍程度離せばよい。深さは球根の高さの二〜三倍程度が標準である。

この球根はチューリップのように毎年更新されるものではなく、少しずつ鱗茎が更新されながら肥大してゆく性質をもつているので、二〜三年に一度植え直す程度でも差支えない。そういう場合は多少間隔をひ

ゴールデン・ハーベスト
5月上旬 開花　黄色

ろげて植えるようにする。

ヒヤシンス

イラン、シリア地方の原産であるが、オランダで改良されたものである。秋植え球根類の中では最も難しいものの一つで（病気に弱く、しかも増殖もよくない）、したがつて高価ではあるが、その色彩と香気は春に欠くことのできないものである。

排水よく耕土の深い砂質壌土ないし壌土で、植えてから開花するまでは湿りがあつて、収穫期には乾く方がよい。

肥料はスイセンと同様でよい。非常に球根がくされ易いから、未分解の有機質はさけなければならない。

植込み時期は九月中～下旬、間隔および覆土はスイセンに準ずる。

球根を購入する際は腐敗のおそれのないものをえらび、とくに球床部のきれいなものをとるようにした方がいい。

水耕用のポットに植えて根がすつかり張るまで冷暗処におき、その後加温（ストーブを焚く部屋の窓辺でよい）して冬に花を楽しむこともできる。水耕液はハイポネックス（プラント・フード）等を加えておけばよい。

クロッカス

主に地中海沿岸地方の原産で、この仲間には秋咲のものもあるが、多くは春咲種が栽培されている。

日当りのよいことが大切で、土質は排水のよい砂質壌土ないし壌土がよい。植え込んでから秋～冬は湿りが充分あつて、春以後少し乾燥気味の所がよい。

肥料はチューリップに準じ、その用量は少なくてよい。三～五糎間隔に、芽の方を上にして指で植えられる。植え付け適期は九月であるが多少おくれても差支えはない。丈夫な球根なので植えつ放しでも結構育つが、毎年植え直してやらないと球根が小さく分球して繁り、開花するものが減つてしまう。

アイリス類

アヤメの仲間は非常に種類が多く、いろいろな根の形のものがあるが、イングリッシュ・アイリスやダッチ・アイリスのように球根をつくるものがある。俗に球根アイリスと呼んで、主に切花用として栽培されている。

イングリッシュ・アイリス（イギリスあやめ）はフランスのピレネー山地原産で、冷涼な気候を好み、北海道では極めてよく育つ。花の色は紫、藤、白などで、六月下旬～七月上旬開花。球根の植え付けは九月頃、肥料は坪当り二～三〇〇㌘（配合肥料）を施して深く耕し、九～一五糎間隔、深さ九糎程度に尖つた方を上に向けて植え込む。

イギリスあやめ
7月上旬 開花

ダッチ・アイリス（オランダあやめ）はヨーロッパ原産の二～三種の交配種で、イングリッシュ・アイリスよりも開花が早く（一〇～一五日ぐらい）、花の色も紫、藤、白のほかに黄色をもつている。日当りのよい排水良好な壌土でよく生育するが、開花までは乾燥しない所でなければならない。

球根植え付けは早すぎると秋のうちに発芽して凍害を受けるから、十月末～十一月始め頃までに植えればよい。イングリッシュ・アイリスと同じように扱う。

ユリ類

ユリ類は極めて種類が多く、したがつてその取扱い方もいろいろであるが、これまでに述べた秋植球根類と異なる点は、チューリップやスイセン等がいずれも掘り上げて乾燥貯蔵しておいた球根を秋に植えるのに較べて、ユリ類はすべて乾燥させぬように取扱う点であろう。また、前者は一斉に発根し、その根は一度切られると再生しないのに較べて、後者（ユリ）は次々と根がでてくる点で異なつている。

ユリ類を大別すると、主として

① 鉄砲ユリ亜属…テッポウユリ、タカサゴユリ、ササユリ等
② 山ユリ亜属…ヤマユリ、サクユリ等
③ 透ユリ亜属…ヒメユリ、エゾスカシユリ、イワトユリ等
④ 鹿の子ユリ亜属…コマユリ、タケシマユリ、オニユリ、カノコユリ等

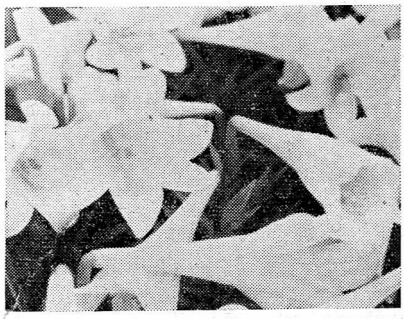
などにわけられ、このほか交配によつて作られた園芸種がある。

ユリの仲間にはタネから育てられるものもある（タカサゴユリ、シンテッポウユリ、リーガル・リリーなど）が、多くの場合は秋（稀に春早く）球根を植え付ける。

スカシユリ、ヒメユリ、オニユリ、イトハユリなどはよく日の当る所、テッポウユリ、リーガル・リリー、カノコユリなどはやや日蔭（午前中日当りよい所）、ヤマユリ、ササユリ、オトメユリ、タケシマユリなどはさらに日蔭になる方がよい。

球根を植え付ける時期は大体九月頃で、テッポウユリ、カノコユリなどのように夏以後に咲く種類は春早く行なつてもよい。

土質は種類によつて多少異なるが、極端な悪条件でなければ花を楽しむには差支えない。肥料はチューリップに準じた程度の基肥のほかに、春発芽後に追肥を与える。



テッポウユリ（ジョージァ）
7月下旬 開花

（北海道大学農学部園芸学教室）